

PECSが自閉スペクトラム症児の母親の育児ストレスに及ぼす効果

○永井 祐也¹・日野林 俊彦²・金澤 忠博³

(1.くらしき作陽大学子ども教育学部 2.藍野大学医療保健学部 3.大阪大学大学院人間科学研究科)

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症 育児ストレス PECS

【目的】

自閉スペクトラム症 (ASD) 児の母親の育児ストレスには共同注意スキルや不適応行動が影響する (永井・前田・日野林・金澤, 2016)。PECS の訓練は、共同注意の発達を促す効果が確認され (永井ら, 2017)、Charlop-Christy et al. (2002) は不適応行動を改善することが示している。そこで本研究は、PECS の訓練によって、ASD 児の母親の育児ストレス、児の共同注意スキルや不適応行動に関する母親の評価を改善させる効果があるのか検討した。

【方法】

研究参加者は、知的障害を伴う ASD 児とその母親 29 組 (PECS Group 11 組、Control Group 18 組) であった。研究参加児の生活年齢 (CA; 45.97 ± 12.76 ヶ月齢)、発達年齢 (DA; 22.88 ± 6.97 ヶ月齢) であった。研究参加児全員が ASD のスクリーニング検査 Social Communication Questionnaire 日本語版 (以下、SCQ) のカットオフ値以上であり、18 名が ASD の医学的診断 (自閉症スペクトラム障害、自閉症、広汎性発達障害) を受けていた。Group 間で ASD 児の CA、DA、SCQ の得点、母親の年齢に有意な差はみられなかった。PECS Group が PECS の訓練を受ける前後 (Pre, Post) に、母親の育児ストレス ASD 児の不適応行動、共同注意スキルを評定するため、日本版 Parent Stress Index (PSI; 兼松ら, 2006)、Child Behavior Check List (CBCL; 井瀬ら, 2001) 共同注意行動尺度 (黒木・大神, 2003) を用いた。さらに、PECS Group の母親には発達支援に参加した感想を終了時に自由に記述するように求めた。

分析には、Pre-Post のペアを被験者内要因とした一般化線形混合モデル (GLMM; Schall, 1991) を用いた。目的変数は、質問紙調査の評定であり、正規分布に従うと仮定し、リンク関数は log リンクを使用した。そして、Group (PECS vs. Control)、Phase (Post vs. Pre)、Group と Phase の交互作用、生活年齢、発達年齢、SCQ の得点を固定効果の検討に用いる説明変数とし、研究参加者の ID をランダム効果として含めた。

本研究は大阪大学大学院人間科学研究科行動学系研究倫理委員会の承認を受けて実施された。

【結果】

1. 母親の育児ストレスと ASD 児の共同注意スキル、不適応行動に対する母親の評価

共同注意スキル得点に関する分析の結果、Phase の主効果と SCQ が有意であった。Group と Phase の交互作用は有意でなかった。すなわち、JA 得点は Post の方が Pre より高く ($p < .01$)、SCQ の得点が高いほど、JA 得点が低かった。CBCL による不適応行動の得点に関する分析の結果、本分析に用いた説明変数は有意に影響しなかった。母親の子領域における育児ストレス得点に関する分析の結果、Group と Phase の交互作用と SCQ が有意であった。すなわち、PECS Group の母親の子領域における育児ストレス得点は Post の方が Pre より低くなったが (Fig.1; $p < .01$)、Control Group では有意でなかった。Pre Phase における

2 群の得点は有意ではなかった。また、SCQ の得点が高いほど、母親の子領域における育児ストレス得点が高かった。

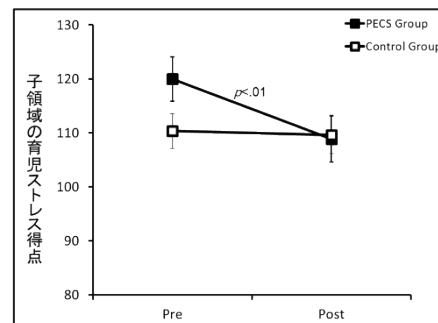


Fig.1 2 群の Pre, Post Phase における子領域の育児ストレス得点

2. 個別発達支援に参加した母親の半年間を振り返った感想

「PECS で本人の要求が少しずつできるようになって、やりとりがスムーズになってきました。」というように、【ASD 児への発達促進の成果の確認】に関する記述が得られた。しかし、それは PECS による要求手段の獲得に関する内容が中心であり、共同注意の獲得に関する記述は得られなかった。

また、個別発達支援の中では ASD 児に対する支援だけでなく、保護者の相談にも対応していた。そのため、「先生方の姿はとて勉強になりました。」というような【関わりかけ方の観察学習】や、「スケジュールカードを見て次の活動へ切り替えやすくなりました。我が家でもトイレに誘うために絵カードを見せると、遊びをやめて移動してくれるようになりました。」というような【相談支援で受けた助言による成功体験】に関する記述が得られた。【関わりかけ方の観察学習】は、支援スタッフが子どもの楽しそうな反応を引き出した際にどんなことを考えていたのか、関わりかけの工夫を解説するように心がけていたことによるものと推測される。また、【相談支援で受けた助言による成功体験】は、ASD の特性や発達段階に合わせた対応方法を提案したことによるものと考えられる。

このように、個別発達支援に参加した母親は、ASD 児の発達促進を実感するだけでなく、スタッフの関わりかけを参考にしたり、相談支援で受けた助言を実践して上手くなった経験を積み重ねたりしていた。

【考察】

PECS の訓練によって、母親の育児ストレスを軽減させる効果が示されたにも関わらず、その要因と予想された ASD 児の共同注意スキルや不適応行動に関する母親の評価は改善されなかった。しかし、自由記述の分析結果から、様々な育児の悩みが相談支援を通して軽減された可能性が示された。周囲から援助を受ける可能性に対する期待を覚されたソーシャル・サポートといい、それとストレス反応との負の関連が多くの研究で示されている (e.g., Quittner et al., 1990)。このため、PECS の訓練を中心とした個別発達支援に参加した母親の育児ストレスが軽減したのは、母親がソーシャル・サポート源として支援スタッフを知覚したことが影響した可能性が示唆された。

(NAGAI Yuuya, HINOBAYASHI Toshihiko, & KANAZAWA Tadahiro)